

向津原遺跡発掘調査報告書

(第3次)

平成8年(1996)3月

島根県柿木村教育委員会

向津原遺跡発掘調査報告書

(第 3 次)

平成 8 年 (1996) 3 月

島根県柿木村教育委員会



△ 対岸国道187号線より見る調査区遠景
(調査区は写真左中央)

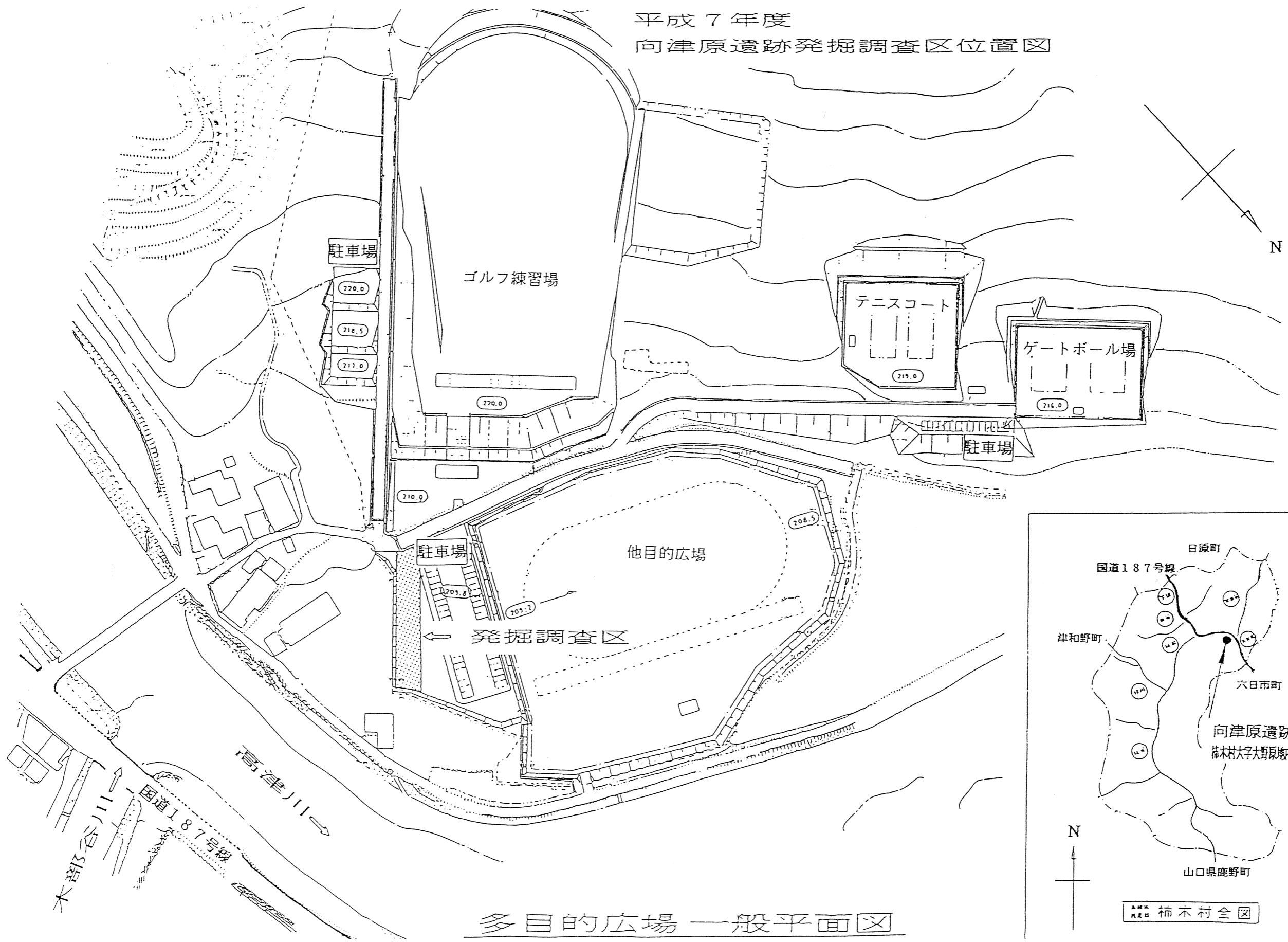


△ 調査前現況



△ 調査完了

平成7年度
向津原遺跡発掘調査区位置図



1・発掘に至る経過

向津原遺跡は、昭和33年頃に日原営林署の種苗事業所（苗畑）としての開発工事の際に石斧や砥石などが発見され、遺跡として昭和37年に登録されたものである。

その後、改めて調査されることもなく営林署の苗畑（約10万m²）として杉や檜などの育苗が続けられていたが、営林署の事業縮小にともない柿木村が平成3年に一帯を大野原運動交流広場として計画樹立し譲渡を受け、柿木村では平成4年に一帯のうち低地部を安全確保のためとり急ぎ平面化工事を行った。

このような経緯の中、柿木村の運動交流広場の計画も具体化され第一期工事とし平成5年度にゲートボール場とテニスコートを、第二期工事として平成6年度にゴルフ練習場を、第三期工事として平成7年度で多目的広場と駐車場の整備を進めることとした。

したがって、向津原遺跡の本格的な調査は平成5年に第一次発掘調査が開始され、平成6年に第二次調査が、続いて平成7年の第三次調査となったものである。

一次および二次の発掘調査は、実施計画のうち山地斜面で試掘調査において遺物遺構は確認されずそれぞれの試掘調査概要報告書にまとめられている。

- (1) 第一次試掘調査 平成5年6月 調査員 木原 光主任主事（益田市教育委員会）
(2) 第二次試掘調査 平成6年6月 調査員 河瀬正利 助教授（広島大学文学部）

ひきつづき第三次発掘調査が計画され、実施計画うちでは低地平面で約700m²相当であり、民地との境界部を有す長方形の区画である。今回の発掘調査場所では地域の人が縄文式と推定される小土器片を拾得しており、遺物遺構の出土が予想される。

- (3) 第三次発掘調査 調査期間 平成7年5月15日～平成7年6月30日
調査指導 河瀬正利（広島大学文学部 助教授）
調査担当 川原和人（島根県教育委員会文化財課 主幹）
三浦一美（柿木村教育委員会）
事務局 三浦愛生（柿木村教育委員会 教育長）
師井志延（柿木村教育委員会 次長）
作業員 河野幸雄 植村 昇 植村マツ子 永安正吉
向津光雄 赤松兼市 永安美代子 永安高秀
永安静子 田中一子（敬称略）

2・位置および環境

向津原遺跡は、島根県鹿足郡柿木村大字大野原字向津原に在所し、高津川左岸で湾曲の内側に位置し、川岸より約100m位の幅をもち水面より高低差約4mの段丘状の沖積地の一部であり山地に接する。上流約100m位の対岸に木部谷川の合流点と、接する山地には小繹があり降雨の際には谷川と化す、現在は水路が整備されているが過去に溯ると相当に不安定な地帯であったと推定される。

柿木村で現在までに確認された遺跡について、平成6年の第二次試掘調査概要報告書（河瀬正利助教授）の位置及び環境の項より引用して以下の記述とする。

柿木村の現在までに確認された遺跡は22ヶ所であるが、河川流域沿いの低地や丘の上に位置しているものが多い。未調査のため遺跡の性格や内容のはっきりしないものがほとんどであるが、遺跡の多くは歴史時代の山城跡、たたら跡である。唯一発掘調査の行われた唐人屋窯跡も中世末から近世にかけての陶器焼成の窯跡である。

先史時代の遺跡としては、向津原遺跡、本郷遺跡、福川遺跡、柿木遺跡などがある。

向津原遺跡は、《柿木村誌》（昭和61年）によると営林署の苗畠開発工事の際石斧2点と砥石1点が発見されるとともに、円形の住居跡らしいものが2～3ヶ所存在したとされているが、一次二次の調査では発見できなかった。石斧は長さ10.9cm、幅4.9cm、厚さ3.0cmのものと長さ15.4cm、幅4.8cm、厚さ2.6cmのものの2点がある。いずれも表裏両面は良く磨かれ前者は粘板岩、後者は流紋岩製である。砥石は一端が欠けているが推定長約15cm、幅8.4cm、厚さ3.0cmの大きさであり、表裏側面ともに良く研磨されくぼみをつくっている。磨製石斧の形からみてこれらの遺物は縄文時代後期のものと推定される。

本郷遺跡は、福川川と本郷川の合流点の北側の丘陵南側裾部の段丘面に位置している。長さ15cmほどの石斧2点が採集されているがこれらは弥生時代のものと推定される。

また、柿木遺跡や福川遺跡（新ヶ原）も福川川の段丘上に位置しており、土師器や須恵器などが採集されていることにより、古墳時代の住居跡が存在すると思われる。

このように柿木村における先史時代の遺跡は、調査された例がなく性格・内容なども明らかでないものがほとんどである。すでに述べてきたように福川川や高津川沿いには、狭いながらも沖積低地や河岸段丘が形成されている。特に高津川と木部谷川、高津川と福川川、福川川と本郷川の各合流点付近は、こうした低地や段丘面の発達が顕著である。このような場所は先史時代の遺跡が形成されやすい条件を備えていることから、今後調査が進められれば多くの遺跡が確認されるものと思われる。

つぎに歴史時代の遺跡では、中世の山城跡や陶器の窯跡、近世の製鉄遺跡（たたら、鍛冶屋跡）、渡し場などがある。

三之瀬城趾は福川川と本郷川の合流点の南側の丘陵上に位置し、城跡のある丘陵は福川川へ突

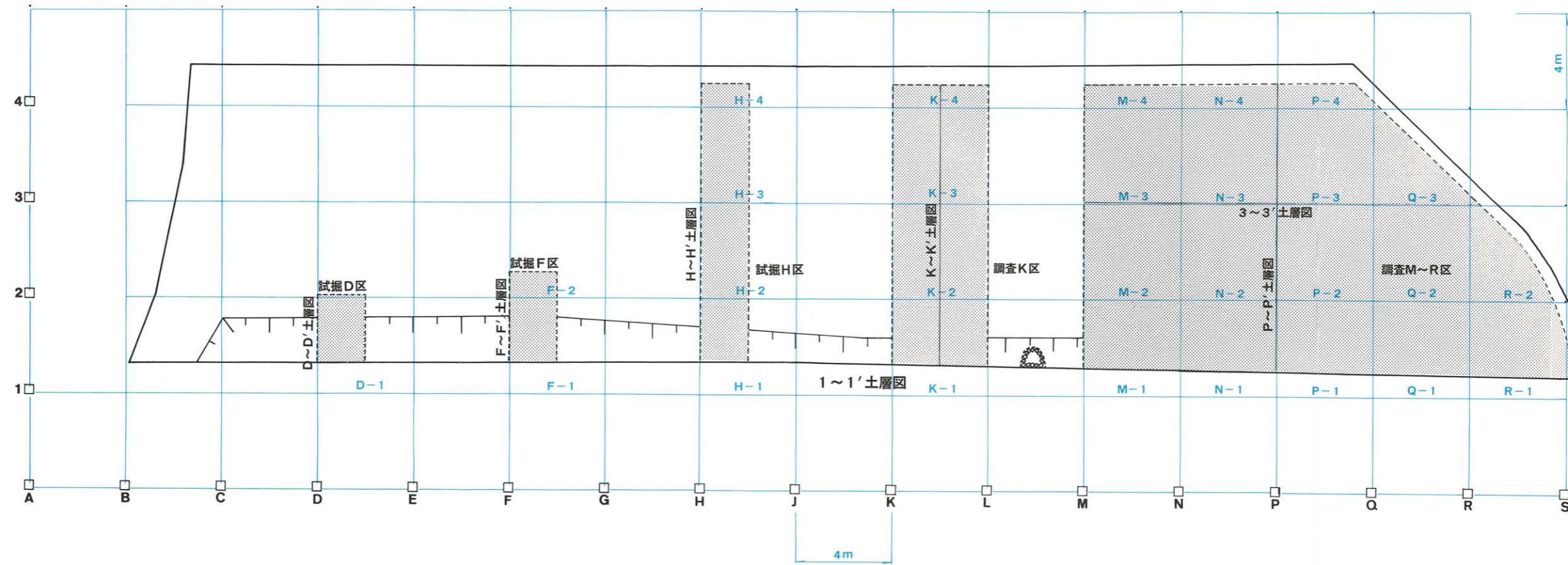
き出すすように南から北へのびており、この地点で福川川は大きく北へ蛇行している。城跡から本郷川沿いに溯れば津和野へ至り、福川川を溯れば山口県鹿野徳地へ至るなど交通連絡の要地を占めており、戦略的な拠点になるだけの条件をもっている。城の構造は丘陵先端部の尾根を利用してつくられた三つの削平段と二つの堀切から構成されている。郭と郭との連絡道も明確で切岸も高い。記録によると吉見氏が津和野城の支城として築城したとされいてる。城の規模は小さいが郭や堀切の構造はしっかりしており、福川川が天然の濠の役目を果たすこと、さらには交通の要地で戦略的な地を占めていることなど極めて重要な城で在ったと言える。

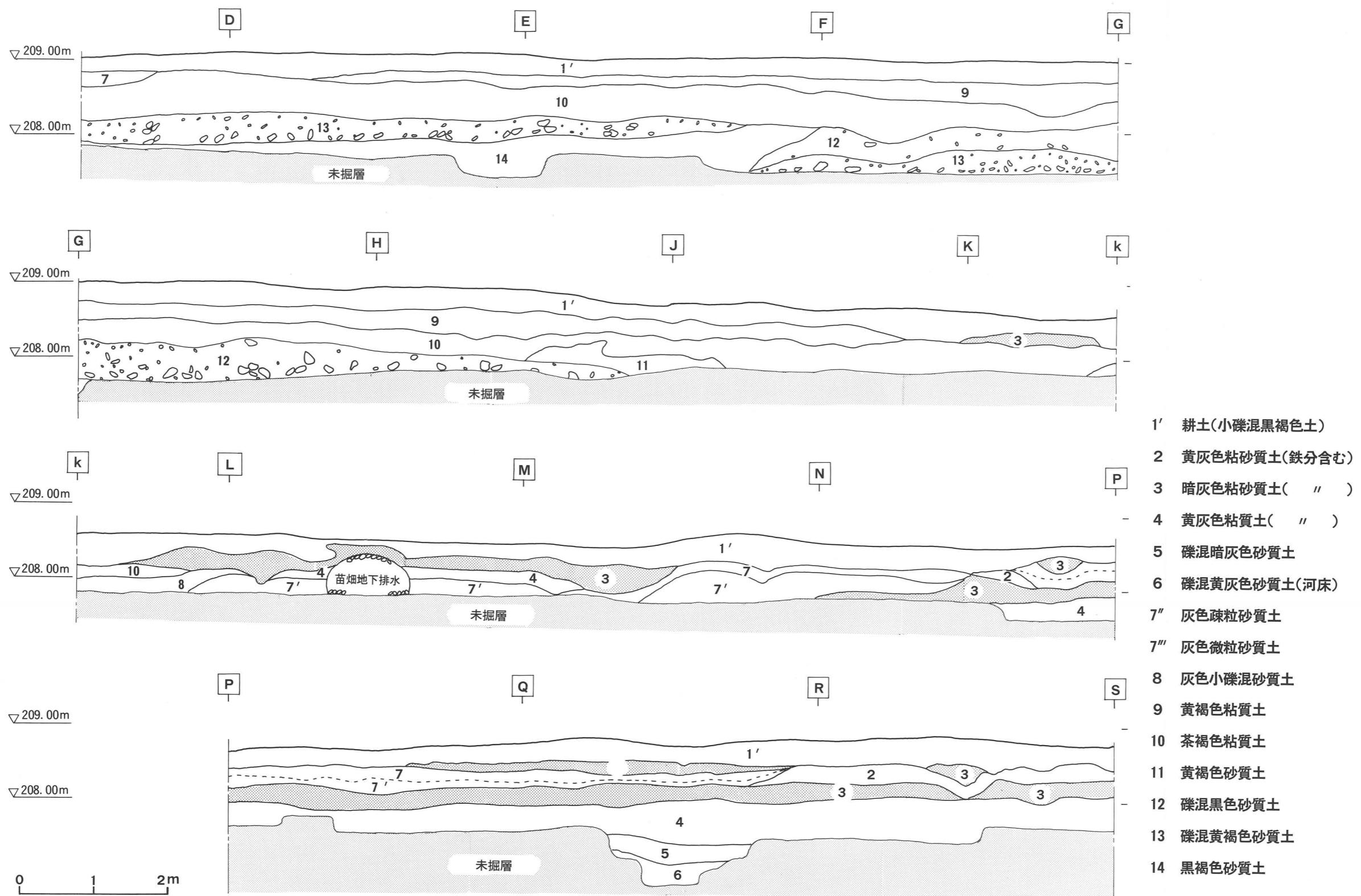
唐人屋窯跡は三之瀬から本郷川を津和野方面へ約3Km溯ったところの丘陵北側斜面に位置している。昭和56年に島根県教育委員会の指導で発掘調査が行われ、階段上連房式の登り窯が発見されている。文禄・慶長の役（16世紀末）の後に渡来人によって焼成が始まられたといわれている。

近世の遺跡としては、たたら跡、渡し場などがある。近世以降中国山地一帯では、砂鉄を原料とし木炭を燃料とした“たたら吹製鉄”が盛んに行われており、全国一の産鉄量を誇っていた。柿木村においても製鉄遺跡（たたら跡）や鍛冶屋跡が残っており、かつては盛んに製鉄が行われていたことがわかる。福川川や木部谷川沿いに10ヶ所程の製鉄遺跡が確認されているが、分布調査が進行すれば、その数はさらに増加していくものと考えられる。

以上、柿木村の遺跡の概略について照会したがその外にもめずらしいものとして、縄文後期のものと推定されるサヌカイト製の重さ1.55Kgもある石刀（浜子遺跡出土・三浦中氏所蔵）や安山岩製で表裏面に縦2本横5本の刻線と側面に1本の刻線のある石錘のようなもの（同・能美明氏所蔵）などがあるが、いずれも専門的な調査分析されたことはない。

平成7年度
向津原遺跡発掘調査図





第3図 1~1' 土層図

3・調査の概要

調査にあたっては、始めに第2図のように $4\text{m} \times 4\text{m}$ のグリッドに区分けし、高津川と直交の方向（北東～南西通り）にアルファベットの杭を、川と並行する方向（北西～南東通り）にアラビヤ数字の杭を打ち基本的相対区画を設定し、その調査区画をほぼ等間隔で2m幅の試掘を入れることにした。

試掘に先立ち、第2図の1～1'方向に土層の観察できる法面があり、第3図のように土層のを確認する。1・発掘に至る経過で前述したように今回の発掘調査場所では、地域の人が縄文式と推定される小土器片を拾得していることと、土層観察のための法面清掃中にその法面より土器片が露出したことより、縄文時代の遺物包含層がほぼ推定できた。

1～1' 土層は中央をほぼ境界にB～J間は砂質土茶色系でJ～S間は粘質土灰色系となっているとともに、下層はいずれも砂礫層で河床の時代があったことがわかる。

推定包含層は第3図中のJ～S間の3, 暗灰色粘砂質土で橙茶色の鉄分条を含んだ粘土を主成分とした土質の層で、乾燥すると強固な土塊となる。

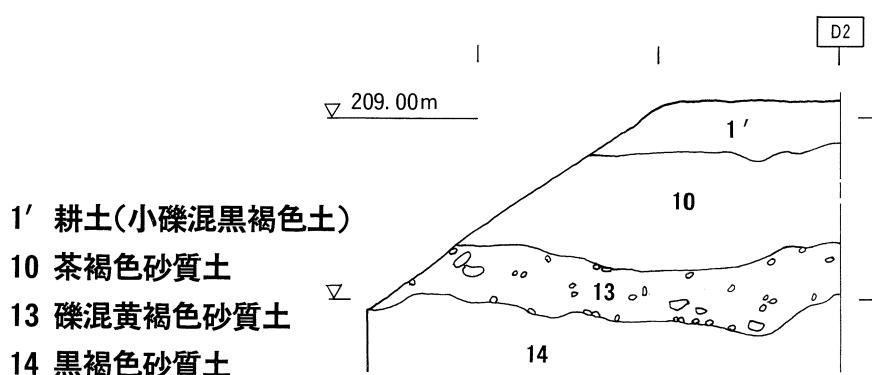
また、元宮林署苗畠時代の給水用50mm塩化ビニールパイプ2本と、地下集石暗渠1ヶ所も確認できることから、攪乱された地帯の可能性もまた大である。

以上のこと念頭に試掘を進め、遺物遺構の出土により拡張調査することにした。試掘はD～D', F～F', H～H', K～K'間を帯状に、M～S間については十字のセクションベルトを残し、それぞれ2m幅で土層に沿って発掘作業に取りかかることにした。

(1) 試掘D区

表土は、小礫混じりの黒褐色の耕土で畠地の様相で客土の可能性もある地層であり、二層は砂を多く含んだ茶褐色砂質土で乾燥すると灰色に近くなる。表層二層とも特記するような出土物はなかった。三層は礫を含んだ砂分の少ない礫混黄褐色砂質土で四層と併せて

遺物を期待した
が、中世以降と
思われる陶器の
小片（口縁部）
1ヶが底辺より
出土した。
…写真1参照…
四層は砂分の少
ない黒色砂質土
で礫は含まない

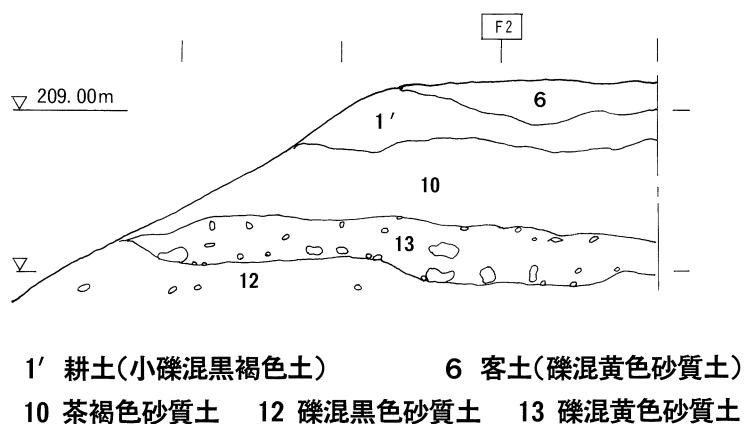


第4図 D～D' 土層図

層である。出土物は発見できず2. 5m掘り進んだところで発掘作業は打ち切った。

(2) 試掘F区

表土は明らかに客土と思われる部分と、D区と同じ小礫混じりの耕土で畑地の様相の部分とに分けられ明治以降と思われる磁器片数点があった。 ……写真2参照……



第5図 F~F' 土層図

三層は砂を多く含んだ茶褐色砂質土で江戸時代以降と思われる陶器片1ヶがあった。

……写真2の上段右端参照……

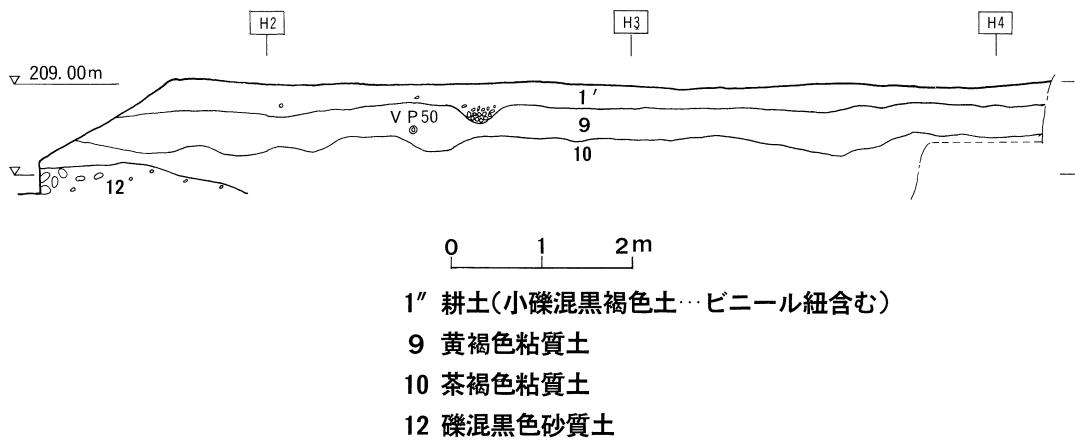
四層は礫混じりの黄褐色砂質土でD区三層と同じであり1~1'土層図上では現れないレンズ状の層か？出土物はなかった。

五層は少し礫の混じった褐色かかった黒色砂質土で出土物はなかった。

部分的に深掘りしてみると、五層の下はD区四層下と同じに礫混じりの砂で河床と推定できることより、約4m掘り進んで打ち切りとした。

(3) 試掘H区

表土は、かつてバインダーを使って稲束を束ねたとき使用していたビニール紐を含んだ



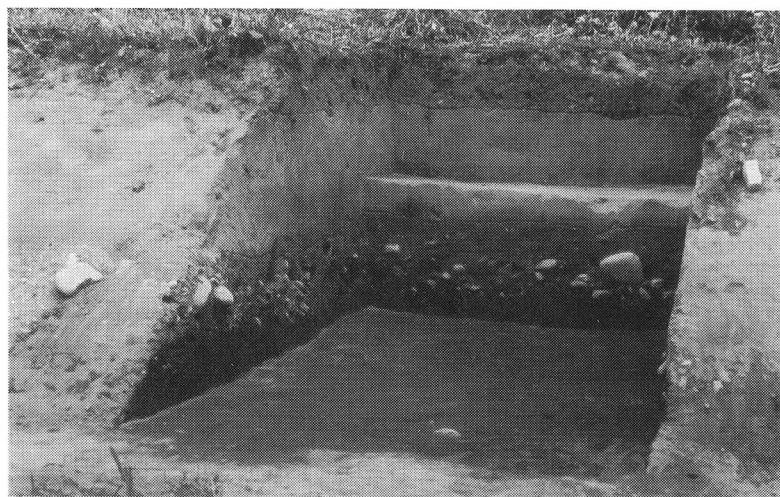
第6図 H~H' 土層図

小礫混じりの黒褐色の水田耕土で、1ヶ所比較的浅いところに集石暗渠らしきものが横断している。この耕土から江戸時代と推定される備前焼きスリバチの口縁に近い部分の破片と灰色系黒曜石片が出土した。 ……写真3の左側上下参照……

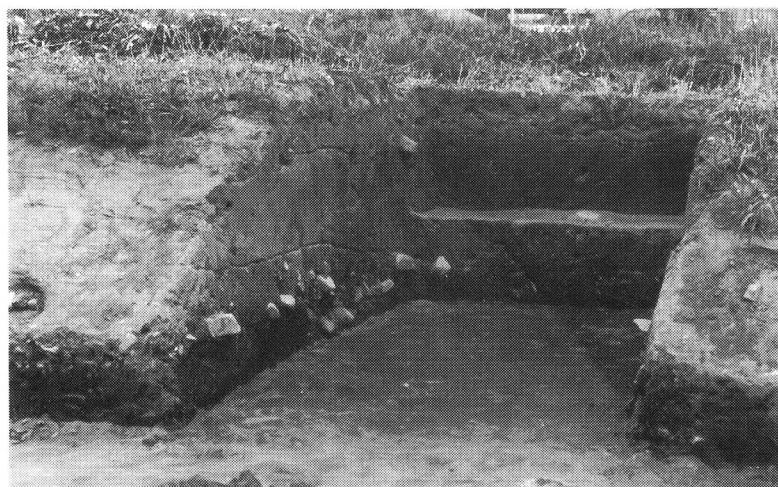
二層は粘土を少し含む黄褐色粘質土で、上記集石暗渠の下近くに當林署苗畠時代の給水用の50mm塩化ビニールパイプが横断している。出土物は灰系黒曜石片と頁石のかけらを見た。 ……写真3の右側上下参照……

三層は部分的に少量の小礫を含む茶褐色の砂質土で比較的厚い層である。四層は礫を比較的多く含む黒色砂質土で固く締まった層である。三層四層共に遺物遺構等の出土は認められなかった。

この地帯は、集石暗渠・給水パイプが在るように部分的に攪乱を受けていると言える。また黒曜石2片は淡色灰系で縞状の流理があり姫島産（大分県）のものであろう。この試掘は民地境界まで約10m掘り進めたが、土器片等がなく拡幅調査は打ち切った。



△ 試掘D区 完了



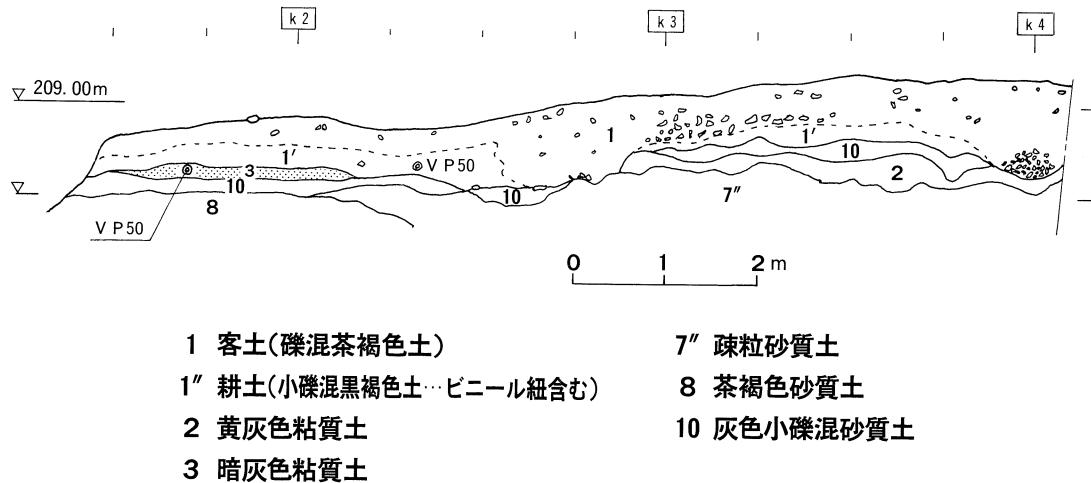
△ 試掘F区 完了



△ 試掘H区 完了

(4) 調査K区

この区画は、K + 2 m の k ~ k' 線より 2 m 幅の試掘より始めたが土器片や石斧等が出士したので、さらに 2 m 拡幅調査としたが拡幅部分からは特記すべき遺物遺構はなかった。

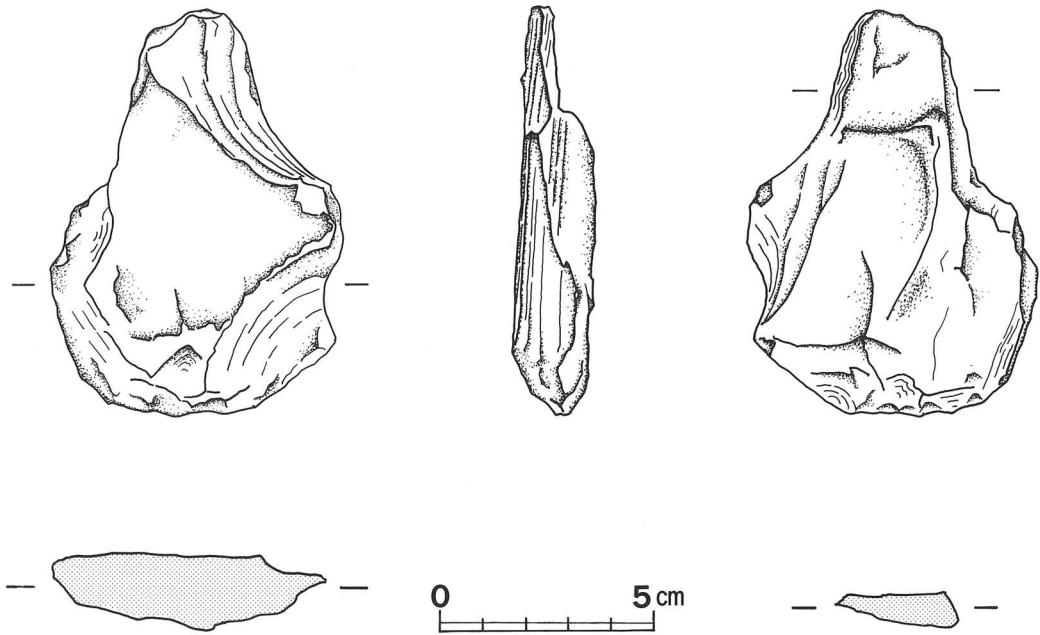


第7図 k～k' 土層図

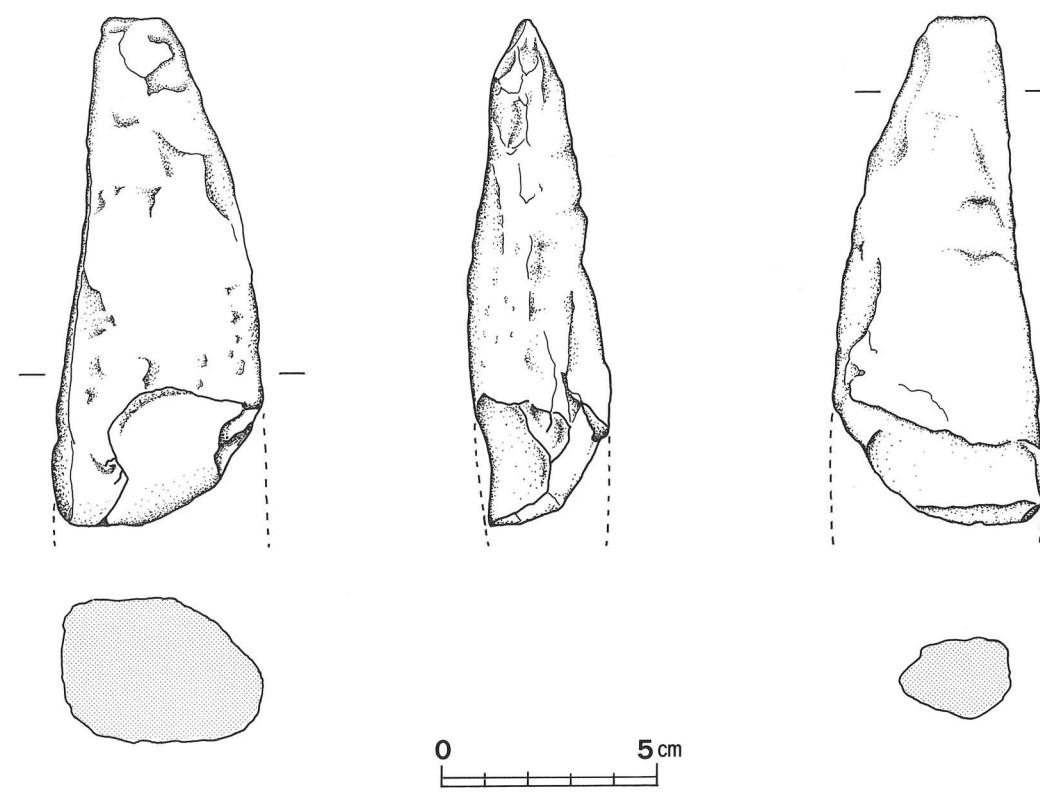
この地帯は、給水用パイプ 2 本と集石暗渠等全体的に大きな攪乱層で、表土は客土と見られる礫を多く含んだ茶褐色土で覆われ、二層にビニール紐を含む水田耕土らしき小礫混じりの黒褐色土である。表土耕土の遺物としては頁岩の打製石斧 1 点、備前焼きのスリバチ片 2 点、寛永通寶（青銅）、弥生式土器片 1 点、その他中世以降の陶器磁器片が数点出土した。
……写真 4・5 参照……

三層四層五層は k ~ k' セクション図のように複雑に入り組んでいる。五層の灰色小礫混砂質土は河床と言ってもいいくらい固くよく締まった地層である。7'' 疎粒砂質土の上辺より、歯部が破損しているが緻密に仕上げられた打製石斧 1 点と縄文式土器片 1 点が出土した。拡幅部三層の 10 茶褐色砂質土で列石と集石（400×800×150）が認められたが、その上下周辺からは江戸以降と推定できる茶橙色に着色された磁器片が数個出土しいることと、その底部および周辺も特に注目するような何物も確認できず、遺構として特定するにいたらなかった。
……写真 4・5 参照……

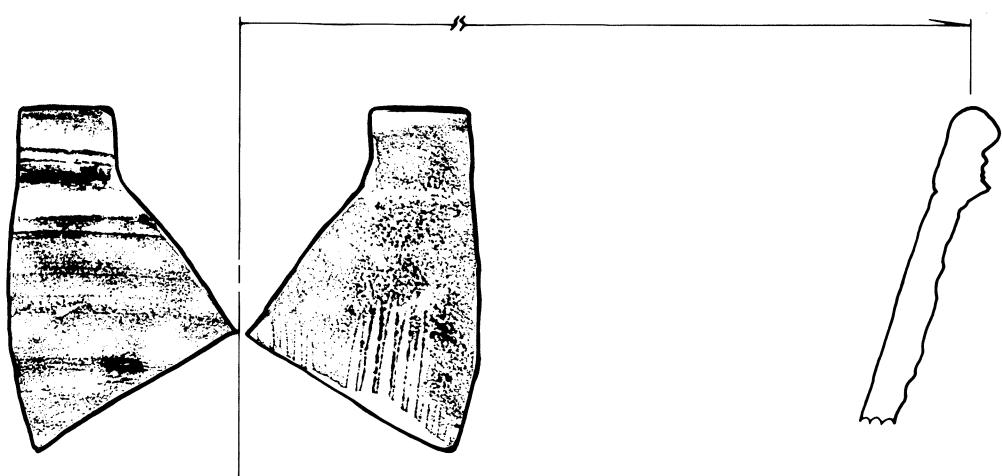
なお、K 区より出土した遺物の一部実測図および状況写真等を次頁以下に添付する。



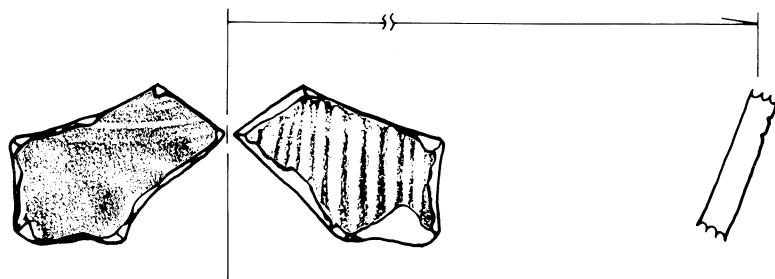
第8図 石斧



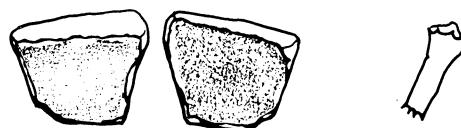
第9図 石斧



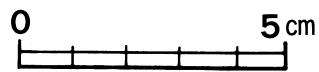
K区表土から出土（スリバチの上部）



K区表土から出土（スリバチの胴部）
上のものと厚さが違う



K区表土から出土（弥生式土器片）



第 10 図



△ K区試掘 完了



△ K区拡幅 列石・集石



△ K区調査 完了

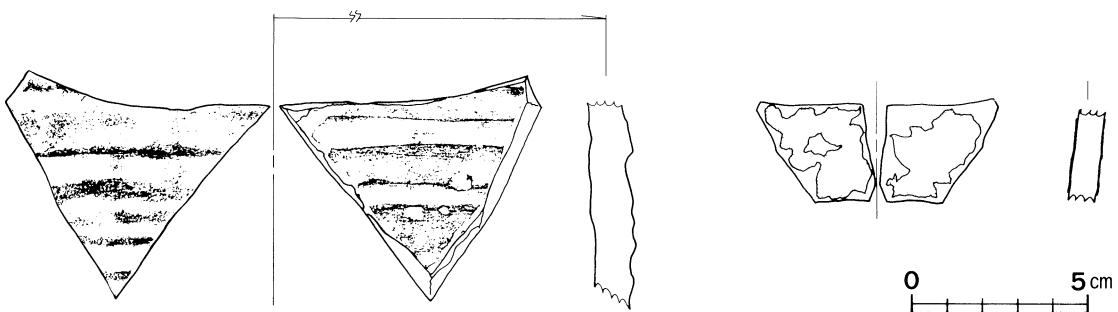
(5) 調査M～R区

この一帯は、1～1' セクション図の3暗灰色粘砂質土に縄文式土器片を含んでいることが事前に確認されているので、M～R区を一体と考え、十字ベルトを残し2m幅の試掘を入れることより着手した。十字のセクションは、縦方向の土層をP～P' 土層、横方向の土層を3～3' 土層として第12図に表すことにした。

表土は、ほぼ十字のクロス部を中心にマウンド状で碎石や稲束に使用したビニール紐を含んだ客土である。二層は営林署苗畠時代の耕土で、樹苗をくるむときに使用する薦に使われていた極細のビニール繊維を含んだ層である。三層は黒色砂質土で元水田耕土であろう。

表土耕土よりは、江戸以降と推定される磁器陶器片が十数点出土した。そのうち2点について、下記実測図をしめす。

……写真6・7参照……



第11図

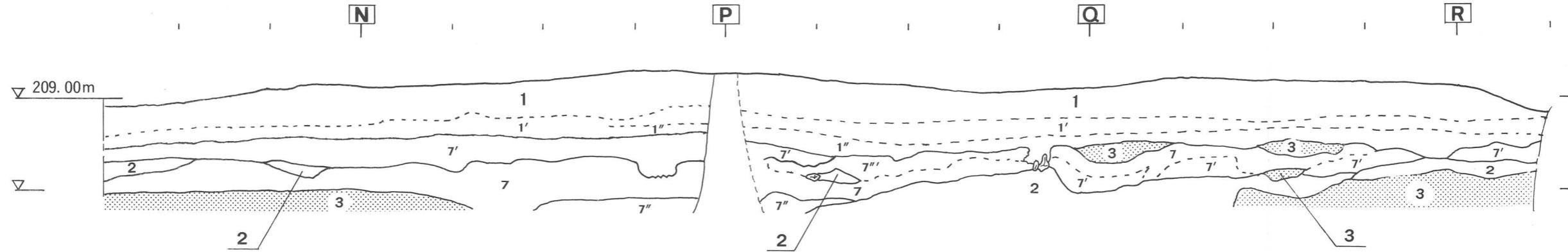
11図の左は甕片で、断面は淡小豆色の胎土、表面には濁った黄白色の自然釉がかかり裏面は簡単なヘラ仕上げで紫がかかった小豆色である。また11図右は消炭壺に極似した破片で、胎土は砂の混じった灰色で表裏両面共に黒色の膜がかかっている。

また、K区で出土のものとほぼ同様の備前焼スリバチ片も出土したが、一体のものかどうかは断定できない。

地元の人に聞くと、この当たりは終戦直後までは竹やぶだったようで、二層以上は営林署苗畠のため引き均し畑地としたようであるが、三層は比較的安定した耕土であり出土遺物からも、中世に溯ることはないと想する。

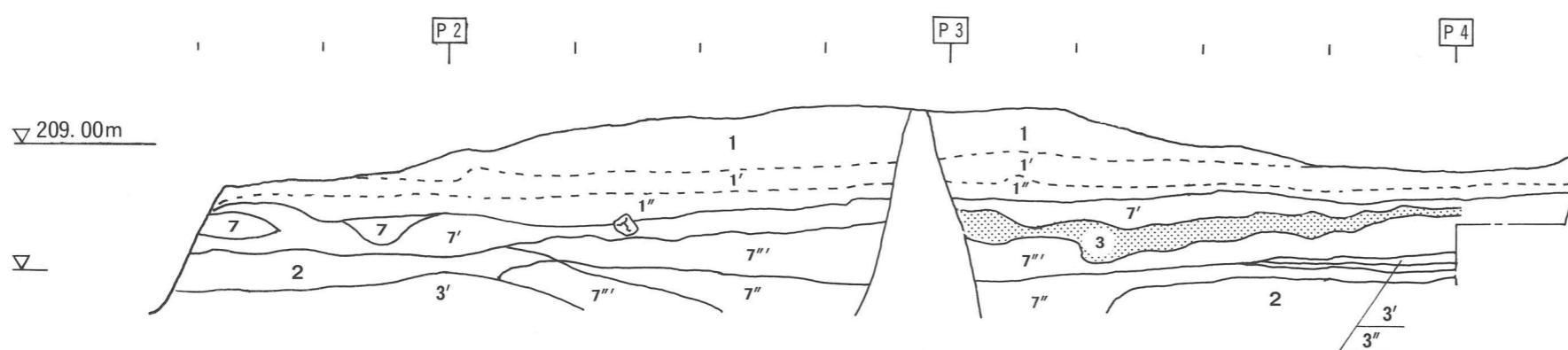
ここまでは特記すべきような状況は認められず、しばらく試掘2m幅の発掘を進めるが、次層の7' 灰色微粒粘砂質土に到達し約5cm掘り下げたところでピットが出土、したがってこのレベルより全体の様相をつかむべく、十字を残してM～R区全体を掘削することにした。

また、1～1' 土層図で暗灰色粘砂質土層を包含層と仮定したが、この層は考えたより片寄った層であると共に、全体的に入り組んだ複雑な土層の地帶で、ここより後述ではほぼ同一レベルごとのステージで行うこととする。



第 図 3~3' 土層図

- 1 客土(礫混茶褐色土…ビニール紐含む)
- 1' 耕土(小礫混黒褐色土…苗畑コモセンイ含む)
- 1'' 耕土(黒褐色砂質土)
- 2 黄灰色粘砂質土(鉄分含む)
- 3 暗灰色粘質土(")
- 3' 暗灰色粘質土
- 3'' 黒色粘灰質土(黒のタール状)
- 7 灰色疎粒粘砂質土
- 7' 灰色微粒粘砂質土
- 7'' 疎粒砂質土
- 7''' 微粒砂質土

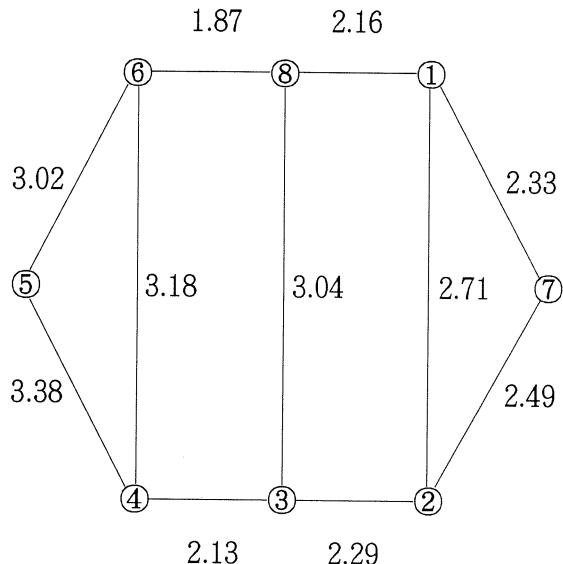


第12図 P~P' 土層図

ステージ1 (208. 45 ± 0. 10 m)

第四層、を約5 cm掘り下げたところをステージ1とし第13図とし添付する。また次ページ以下の状況写真を参照されたい。

ピット（柱穴）が1～8ヶ確認され、最大のものはピット4で口径40 cm底径37 cm、最小のものはピット6で口径24 cm底径7 cmを測り、ピット1～4は比較的大きく、ピット5～8は小さい、また深さは15～23 cmとほぼ平均化されている。



ただしピット2は上部過掘りの可能性があり9 cmと浅い。ピット2, 3, 4は一直線状にあり1, 8, 6では8が11 cm位外に膨らんでいる。また1, 4, 6, 8には詰石らしきものがあるがいずれも偏平に近い石である。

ピット間の水平距離は左図のとおりであり顕著な規則性はない。

この8ヶのピットが、それぞれの関連性をもつかは断定出来ないが、□1, 2, 4, 6の面積は概算でほぼ8畳間に相当し四辺は東西南北に位置しており、祭祀集会の場又は倉庫等と推定しても不自然ではない。

S X 01, 02, 04はいずれも石が直線的にならんだもので、とりわけS X 02, 04は偶然のものとは考えにくい。並びの両端は第13図の通りでもっと連続していたものか、過去において寸断されたものは発掘調査の過程では判別できなかつた。また断面は後の状況写真のように10～20 cm掘り込まれた溝に土を戻し石を並べた様相であり水田の畦や水路の縁等ではない、またピットと関連づけることにも無理がある。

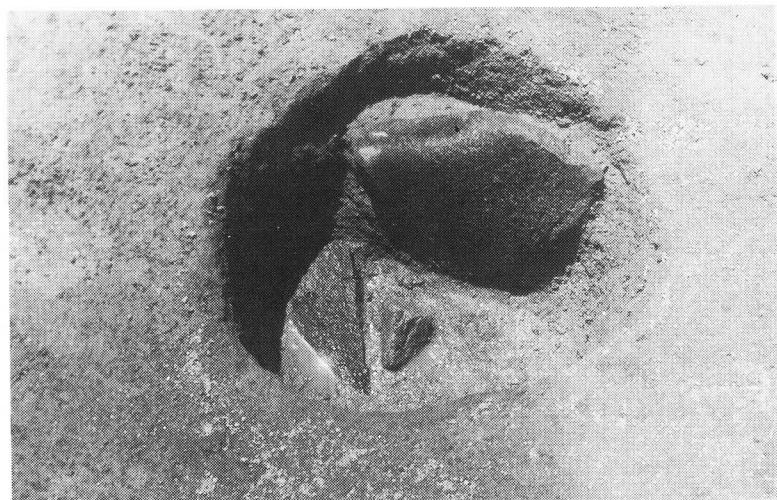
S X 03は落ち込み部で、片端に向かって浅くなっていて自然の状況と考えられるが、落ち込みの底部に近いところから第17図（実測図）に表す脱穀につかれた千歯の歯と近世のものと推定される磁器刃が出土している。

S D 01, 02は平均的幅20 cm深さ5 cm前後の溝で、ほとんど勾配はない。13図のように01は自然的な曲線をもち、02は人工的直線の対照的なものである。溝の中の土は01では下側半分は木炭粉と鉄分を含んでるので識別できる灰色微粒砂質土で土質としては周囲と同等の土であり、上側は茶褐色に近い砂質土で埋まっていたものである。02は全体的に茶褐色土で埋まっていた。01, 02共に図下方は宮林署苗畠時代の給水管が同レベルで横断していてその先はわからない。

第13図中央下部のRmは鉄線を約8 cm□で交差させたもので、ピットの平均的レベルより約5 cm位上位にあった。これは目での観察では腐食しているとはいえ、明らかに現在建設工事等で使用されている#10番線（又は#8）である。



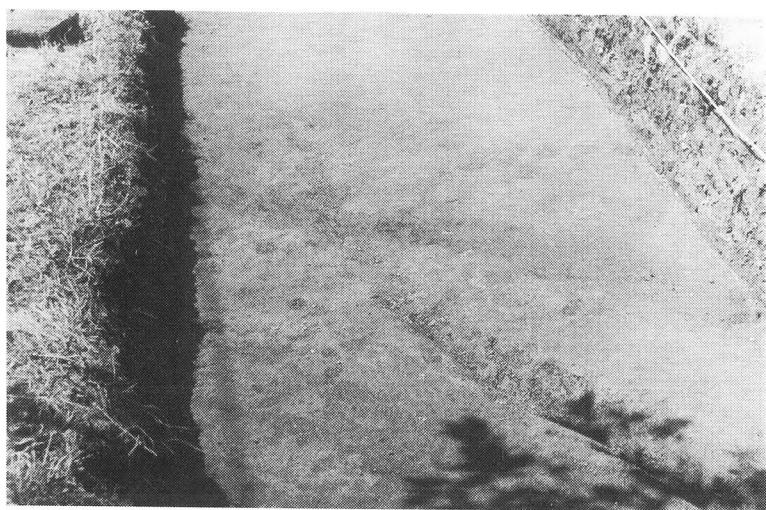
△ MN区試掘 Pit 1が見える



△ Pit 1の状況



△ P区試掘 Pit 2とSX01



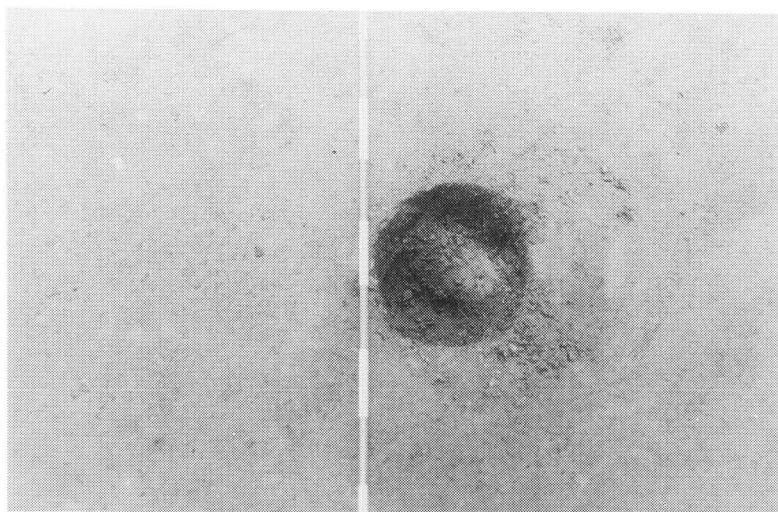
△ M区試掘 S D 0 1が見える



△ S D 0 1の状況



△ P区 ステージ1のS D 0 2



△ M区 ステージ1のPit 5



△ M区 ステージ1のSX04



△ M区 SX04の断面



△ P区 ステージ1のSX02



△ P区 SX02の断面



△ MN区 ステージ1の状況

ステージ2 (208. 20±0. 10m)

ステージ1からの移行過程において、第3図1～1' 土層図および第12図P～P'・3～3' 土層図の推定包含層（3暗灰色粘砂質土）に広く到達するものと予測していたが、発掘を進めていくと、推定包含層は1～1' ラインに沿って最大で1～1' ラインより離れるに従って片寄り面積を急激に減少していった。MN区は砂質土系の土質でありまたPQR区はP-1, Q-1, R-1, Q-2, R-2区画では粘質土系、P-2, P-3, P-4, Q-3区画は砂質土粘質土系の入りまじった土質で、相当な水流による影響を受けていると推定される。

出土遺物としては、Q-1区画を中心に暗灰色粘質土層を主包含層として縄文式土器片が数点と弥生式土器片が数点及びMN区からも縄文・弥生式土器片が数点出土したが、いずれも小片であると共に劣化が激しく水洗いで溶けるくらいである。またMN区からは唐津焼きと思えるものも数点出土した。石片も数点出土したが石器に関わるものと推定されるものも2点（横剥ぎ片）を加え数点あった。

第14図に示す、P-2区画のピット9・10・11及び石の点在は遺構に伴うものと推定できるが、部分的であるとともに同時代のものか、時代的ずれがあるのかも周囲の状態からも判別されない。SX05は落ち込みで木片混じりの黒色粘炭砂質土で埋まっていたもので、底辺部より磨耗した半身の石鎌が1点発見された。

ピット部分の状況写真を掲載するが、中央の掘り下げた部分は石の重なりの状態を確認のためであり土質等に変化があった由ではない。またピットの周辺のくぼみは、土質のやや変わった部分を試掘したもので、ピットとして確認はできないもの。なおピット9は口径24cm底径12cm深さ26cm、ピット10は口径23cm底径11cm深さ17cm、ピット11では口径27cm底径20cm深さ10cmであり、その間隔はピット9～10で62cmピット10～11間で89cmを測る。



ステージ3 (207. 85±0. 10m)

ステージ2からの掘り下げ過程では、M-3区画より砂質土層で石鏃1ヶが、N-1区画では粘質土層より縄文式土器片が数点、N-2区画の疎粒砂質土層より特徴の顕著な縄文式土器片で比較的大きなもの(60×70mm)が数点と散在した。P-1区画の粘質土より竹筒刺突の文様をもつ縄文式土器片2点、Q-1・Q-2・R-2区画の暗灰色粘砂質土より縄文式土器片が30点以上と弥生式土器片数点、R-2区画からは黒曜石3点を含む石片数点の出土を見た。土器片のほとんどは磨耗劣化の激しいもので、内側が黒味がかり外側は暗黄土色のものである。また1点のみとはいへ陶磁器の小片の出土を見たがどのように考えるべきなのか。

また、Q-3区画を中心に小枝を多く含む流木溜りがあったが小規模のものである。

第15図でステージ3として状況を表すが、石は少なくなり全体的に残留物も減少しているが、土質としては粘質土と砂質土が入り混じてレンズ状をウエハーで包むような状態やラクダの背のような凹凸をくり返している。

第15図中、S tは杭のように突き立っている状態の直径5~7cmで長さが30~40cmくらいの丸木で、いずれも80度前後に傾き両端は腐食劣化で先細りの状況であり目視による観察では加工したかどうかは判別できない。また3本と少ないため規則性を識別できず、遺構に伴うものか否かも断定には至らない。

R Y?はおそらく流木乃至は転木であろうが、参考のため実測記録しておく。一方は弓の半身形で直径3cm強で長さは84cmくらいの曲がった丸木で、中央あたりで裂け目が入っている。もう一方は何かの柄のような形で一端に枝を利用したとも取れるような凸部をもつ最大直径7cm強で長さ110cmくらいの丸木で、途中で折れその部分が特に腐食している。両者ともに皮質部はなく実際の太さがどれだけあったのかはわからない。

S X 0 6は小規模のドングリ溜りで、その量は吸い物椀に二杯程度でドングリ自体は皮質のみで、砂土の落ち込みにまとまって出土した。周辺は第15図のように転木と点石に囲まれるように位置しているが、量的に少ないと土器片等が全くないことで、遺構の中の貯蔵場所と位置付けるには無理がある。

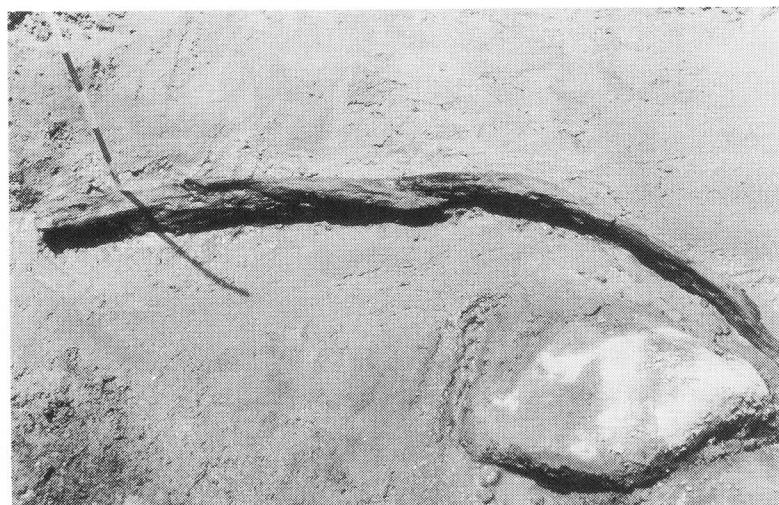
また、第13~15図で表現した石群は径でおよそ10cmを越えるものは、丸味はあるものの稜線をもつ石で、渓流の形に近いものばかりで現高津川の石とは異なる。

このステージ3に至るまでに、今回の発掘調査における出土遺物遺構のほとんどが結果的には出尽くしたことになるが、さらに調査を進めるため10~15cmの掘削を続けたが縄文式の小土器片が2ヶ発見されただけで、M~R区全体が砂質土系になり部分的に混在続ける粘質土の中にも遺物は発見されなくなったので、この第3次発掘調査は打ち切ることにした。

また、第3図1~1' 土層図のQ~R間の部分的深掘り試掘に見られるように、このステージの70cmくらい底は河床であることを追記する。



△ N区 St 杭?の例



△ M区 Ry?の状況



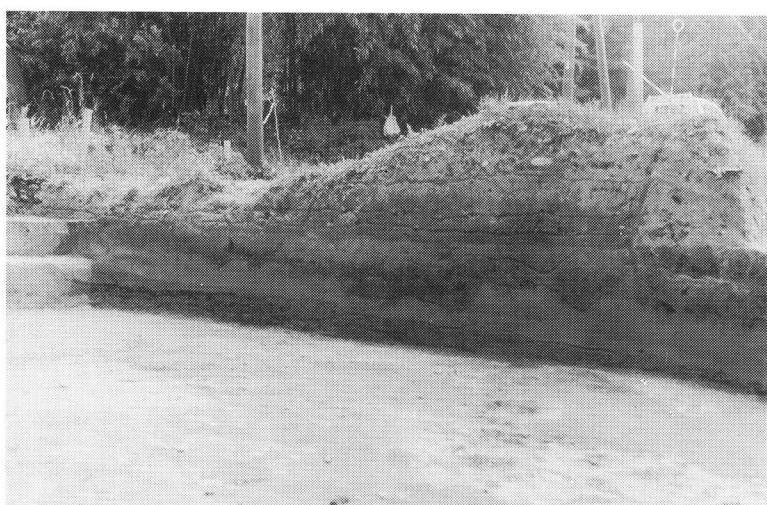
△ N区 Ry?の状況



△ P Q 区 流木の状況

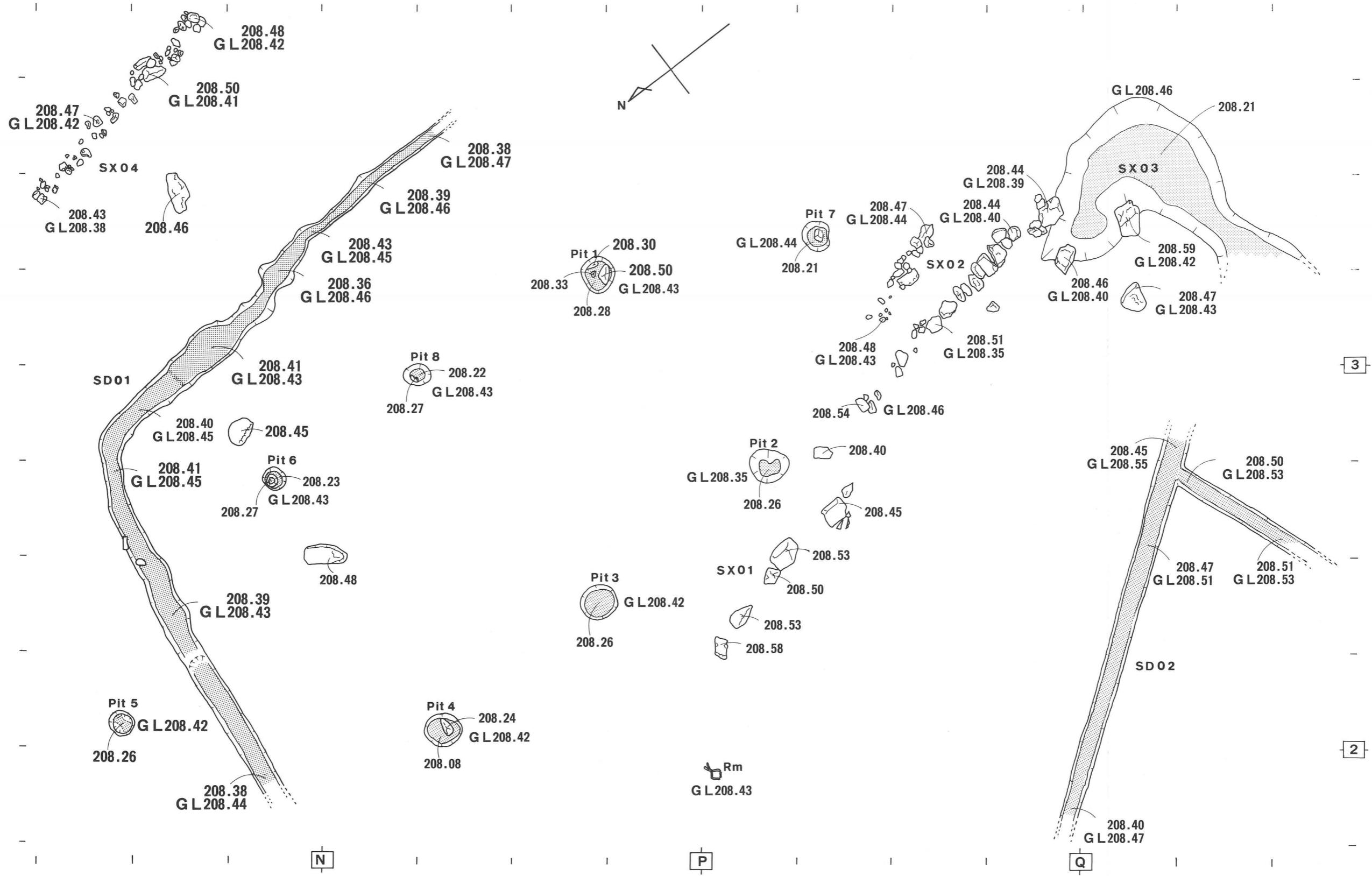


△ P 区 SX 0 6 の状況

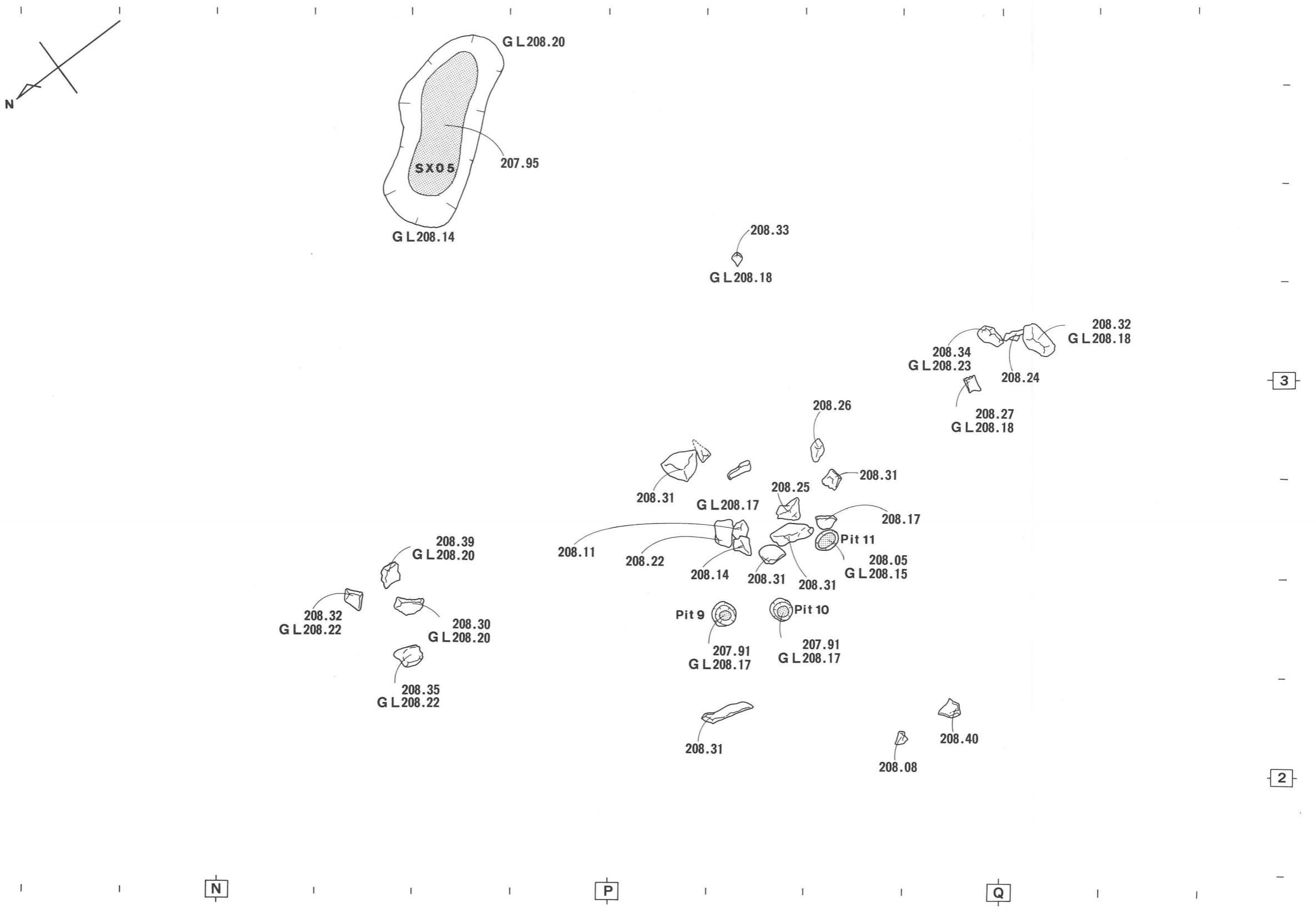


△ P ~ P' 土層の一部



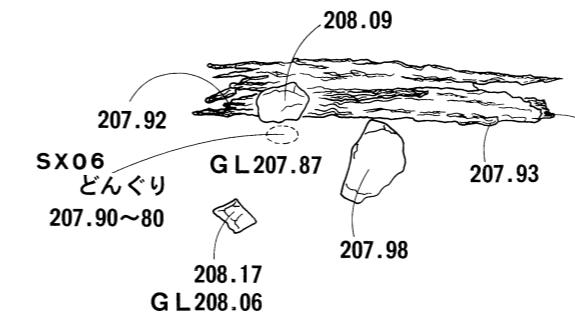


第13図 ステージ1 (208.45±0.10m)



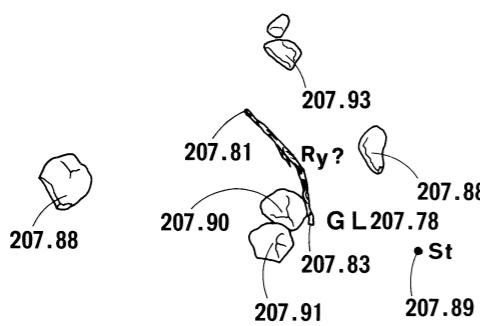
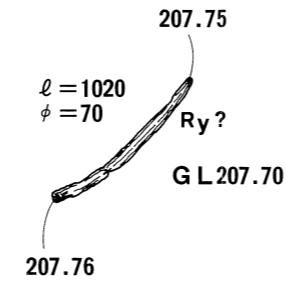
第14図 ステージ2 ($208.20 \pm 0.10m$)

N



207.91
GL 207.83

[3]



208.05
208.07
St
St

[2]

[N]

[P]

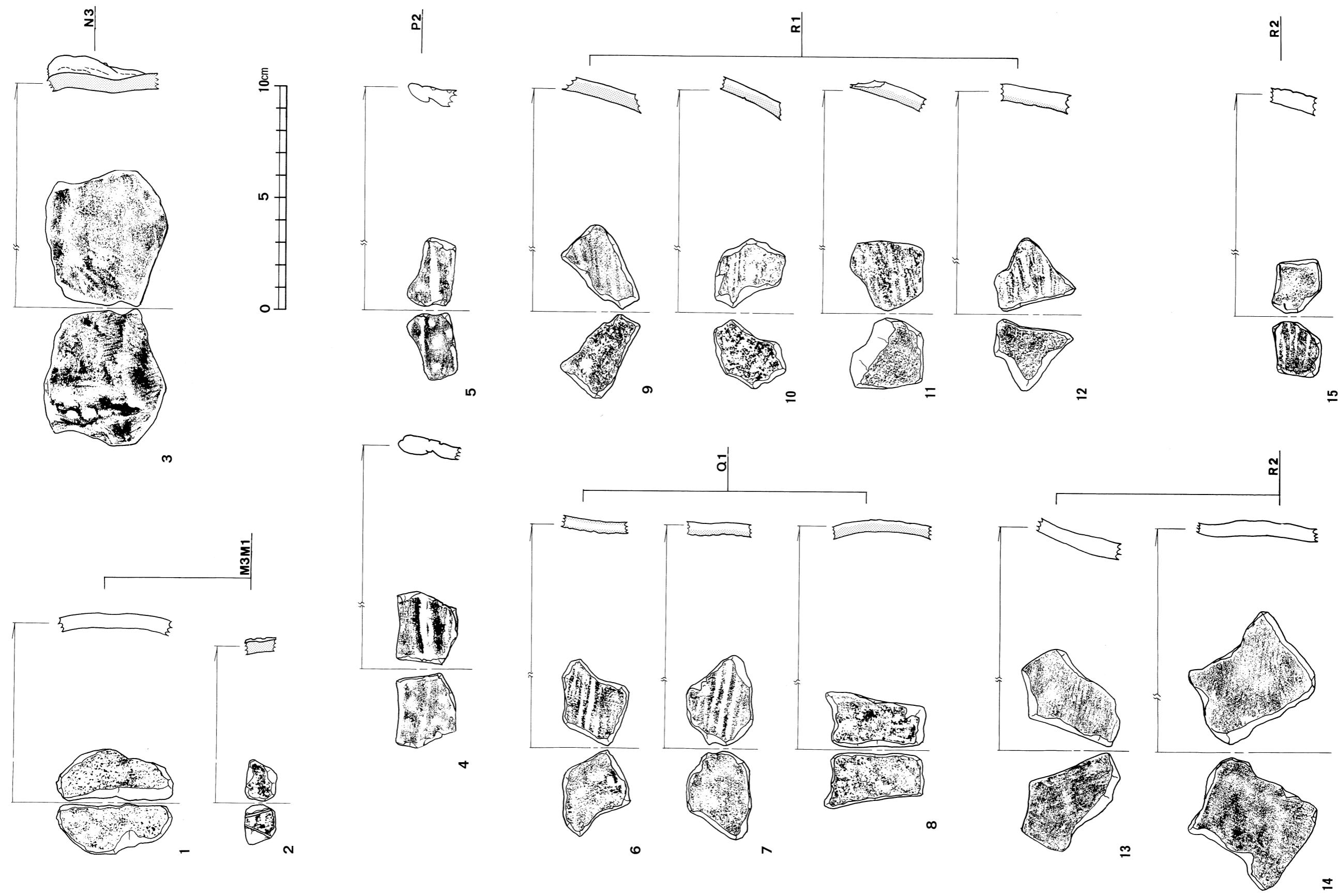
[Q]

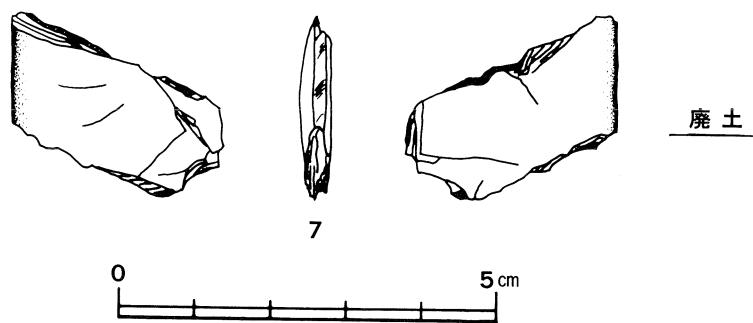
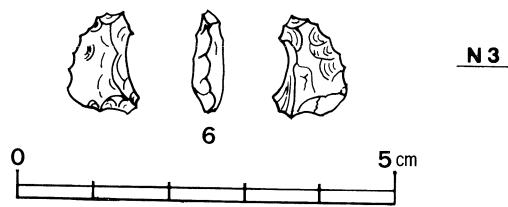
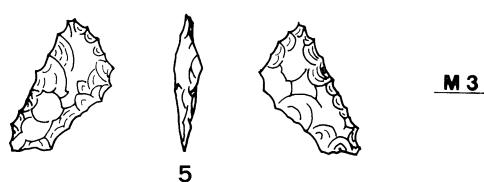
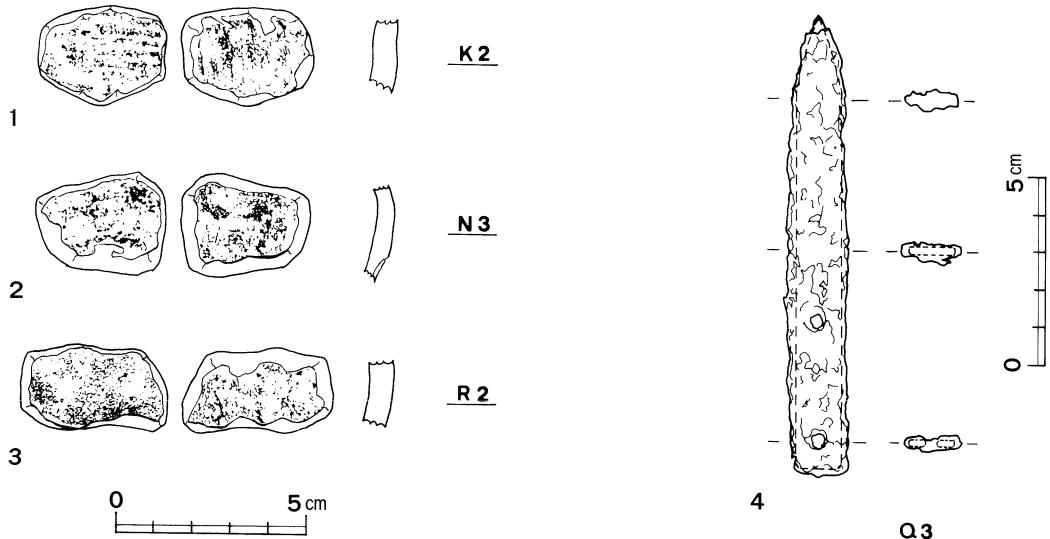
第15図 ステージ3 207.85±0.10m

実測図一覧表

挿図番号	出土区画	種別	遺物の特徴	備考
16-1	M-3	縄文土器	黄土色、劣化で仕上げ痕不明	晩期
16-2	M-1	同上	暗褐色、沈線で破損、偏平な刺突痕	不明
16-3	N-3	同上	暗褐色、縦の隆帯紋に竹筒刺突文様	前期
16-4	P-2	同上	暗褐色、横の沈線に竹筒刺突文様	前期
16-5	P-2	同上	暗褐色、同上	上と一体か
16-6	Q-1	同上	表黒褐色、裏黒色で貝条痕の仕上げ	晩期
16-7	Q-1	同上	表黄土色、同上	同上
16-8	Q-1	同上	同上 同上	同上
16-9	R-1	同上	表茶褐色、裏黒色で薄貝条痕仕上げ	同上、劣化激
16-10	R-1	同上	同上 同上	同上
16-11	R-1	同上	同上 同上	同上
16-12	R-1	同上	同上 同上	同上
16-13	R-2	同上	表裏共茶褐色、裏貝条痕の仕上げ	晩期
16-14	R-2	同上	同上 同上	同上
16-15	R-2	同上	表裏共黄土色、表に横沈線	不明
17-1	K-2	弥生土器	表裏共乳白色、	劣化激
17-2	N-3	同上	同上	同上
17-3	R-2	同上	同上	同上
17-4	Q-3	脱穀具の歯	赤錆化しているが芯は強固	明治以降
17-5	M-3	石 鏃	安山岩、半身でエッジが磨耗、	縄文晩期
17-6	N-3	同上	同上	同上
17-7	廃 土	石 器 片	黒色粘版岩、両面が緻密に研磨	種別不明

第 16 図





第 17 図

4・まとめ

調査区の全域に渡る1～1'セクションの部分的試掘で確認すると、その高津川側寄りでは標高206.60m位に山寄りでは206.40m位に河床が確認でき、かつては流域であったと推測できると共に宮林署苗畠時代の地下設備があり、各所に人工的な帶条の寸断を受けていた。

また、調査区に直接流れ込んでいたであろう山寄せからの沢による自然的攪乱も3～3'土層図やP～P'土層図からも推測できる地帯である。

- (1) A～H区は全体的に砂質土系で、中世以前の遺物遺構はほとんど確認されなかつたが、試掘H区の耕土および第二層から出土した灰色系の黒曜石片（大分県・姫島産）より、柿木村の地にあっても古くから九州圏との交流があったことがうかがわれる。

J～L区は砂質土系と粘質土系の接点地帯で、k～k'土層図に見えるよう人工的な攪乱を受けていると推測できる地帯で、出土した石斧は流紋岩の打製石器で縄文晩期のものであろう。いずれも客土によって運ばれたと推測される。

- (2) M～R区は上層は比較的規則的な土層であり、その直下の中層にピットを含む石列石群や溝があるが、ピットを見る遺構は出土遺物より江戸時代まで溯ると推定するのが妥当ではなかろうか、ピット□1-2-3-4-6-8を建物と仮定すれば、溝S D 0 1は屋根よりの雨だれ跡と考えられなくもないが、そうすればピット5, 7の説明がつかなくなる。やはりピットについては一体のものと考えるのが自然ではなかろうか。

中層以下は、砂質土系と粘質土系が入り乱れ小規模のレンズ状の土層が数ヶ所あり、下層の流木溜りと併せて考えると、大雨時の沢の水流の影響を相当受けているものと考えられる。

- (3) 中層以下よりの遺物のうち、比較的形のしっかりして特徴の判るもの第16, 17図に表したが、そのうち土器片で、第16図の3は土器頸部よりの立上がり部分で表面に縦の隆帯紋に竹筒刺突の文様をもち、第16図の4・5は内側に折合せ仕上げた口縁部と表面には横の沈線と刺突紋をもつ。裏面は粗い仕上げで部分的に条痕が見える。

この3片は縄文前期のものと推定される。…写真13の上段と写真14, 15の右…

また、他の縄文土器片については、劣化が激しく特徴をとらえにくいが板状施文具による仕上げや貝殻条痕紋による仕上げ具合から、縄文晩期のものであろう。

これらのものより、淡黄土色の土器片については弥生前期のものではなかろうか、断定はできない。

- (4) 全体の結果から言えるが縄文前期、縄文後期、弥生、中世以降と大ざっぱに出土遺物を分類したが、縄文中期や古墳時代のものが欠落していることが言える。

- (5) 土器を含む層が沢の出口にある上、入り乱れた地層に不規則に埋没していて遺物の角が取れて丸みを帯び劣化が激しく、全体的に石器石片が少ないと等から今回の調査区中層以下の遺物は、あまり遠くない地点から流着した二次的包含層にあったと推定して

よいのではないか。

今回の調査で出土した遺物について概略の数を上げると

縄文式土器片	60点	(途中破損実数が多い)
弥生式土器片	15点	
石器又は石片	20点	
金属類	2点	(古銭は含まない)
種子(どんぐり等)	少々	
陶器磁器片	20点	

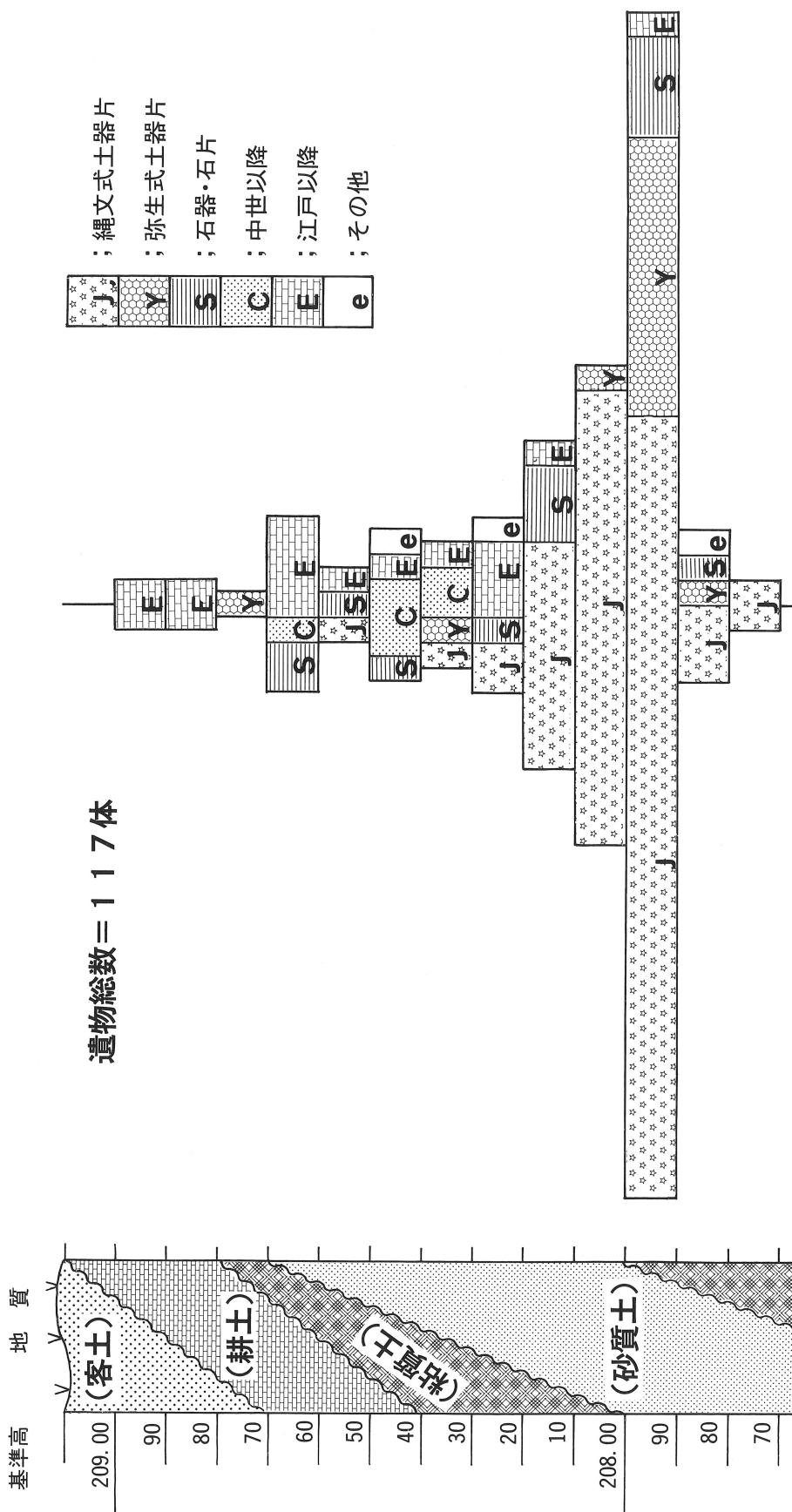
これらを、次頁の第18図のように垂直的分布に分類すると、下層に縄文・弥生式のものが多いとは言え、中層から下層にかけては時代を越えて遺物の混在した状況がよくわかる。

また、今回の調査中に隣接する山寄りのゴルフ練習場の工事での管理棟の床堀りを見ると底は全体的に青白色の粘土層があり、従って調査区の山寄りに粘質土系の層があったことがうなづけること。あわせて工事の張芝のために茶褐色砂質土壤のPH検査の結果を聞くと、PH値5.2～5.3とかなり強い酸性土壤であったことを追記しておく。

最後に今回の第三次発掘調査にあたり、柿木村当局の配慮により非常に良い発掘調査の環境のもと順調な作業が進められたことに謝意を表すと共に、山口大学人文学部教授中村友博氏および匹見町教育委員会渡辺友千代氏のご好意により有意義な助言戴いたことに心より感謝いたします。

参考文献 島根県教育委員会 西川津遺跡発掘調査報告書3(S62.3)
愛知県南知多町教育委員会 清水ノ上貝塚発掘調査報告書(1976)

遺物の平均的分布状況



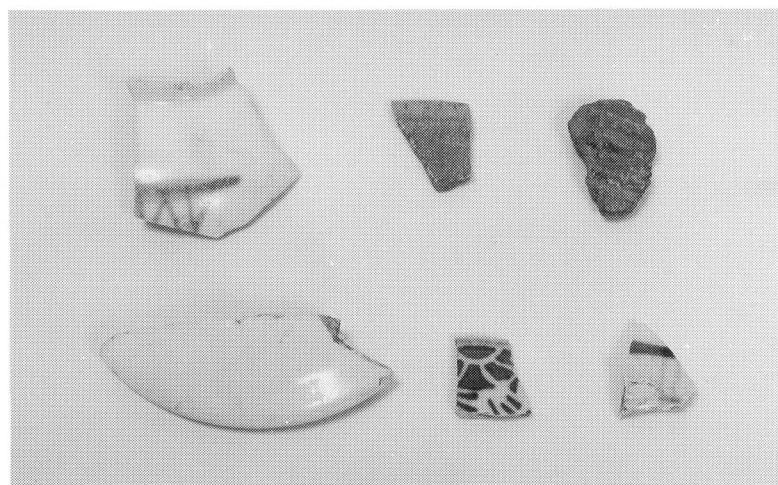
第18図 遺物の垂直分布

写 真

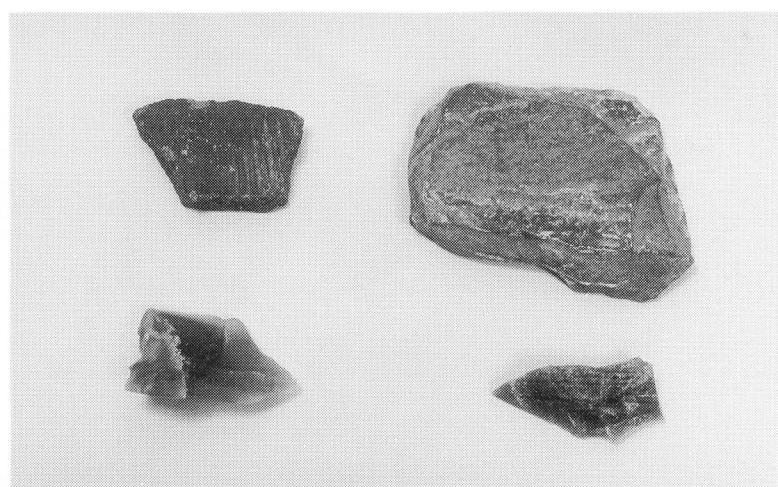
—



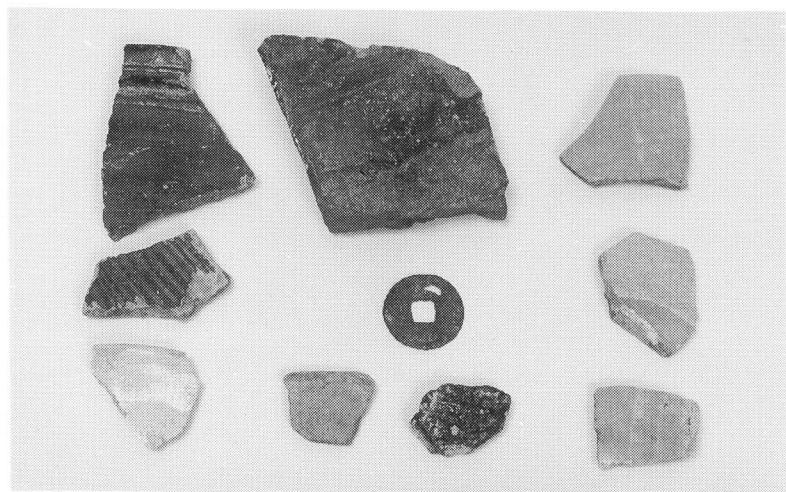
△ #1 試掘D区



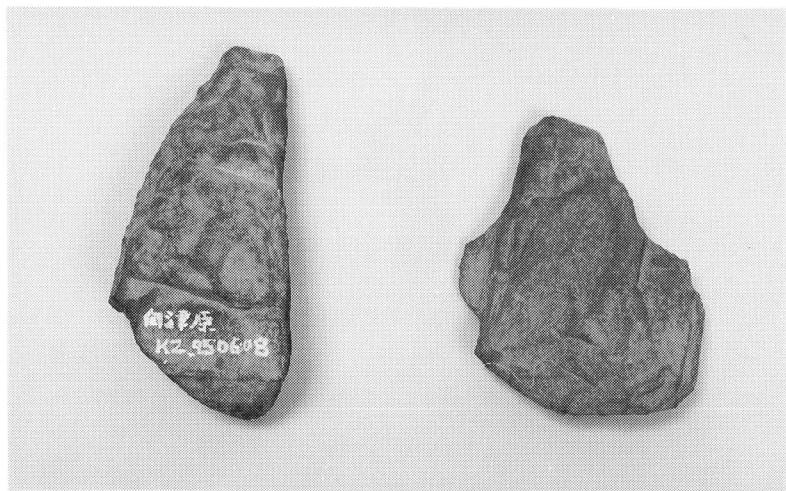
△ #2 試掘F区



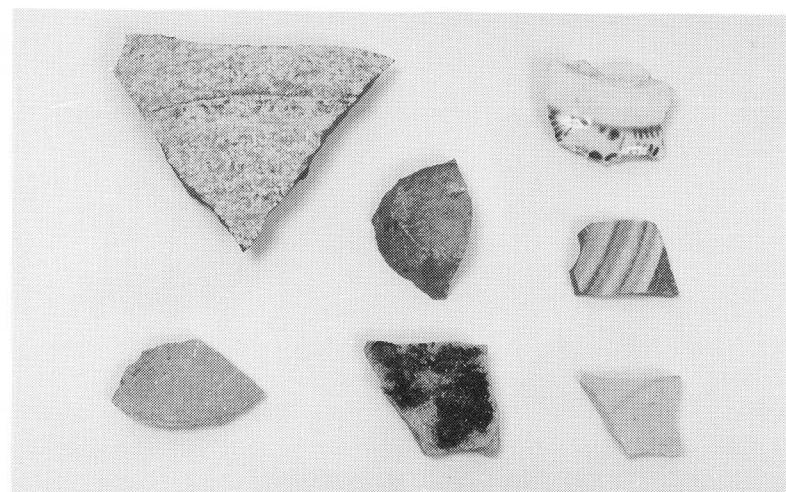
△ #3 試掘H区



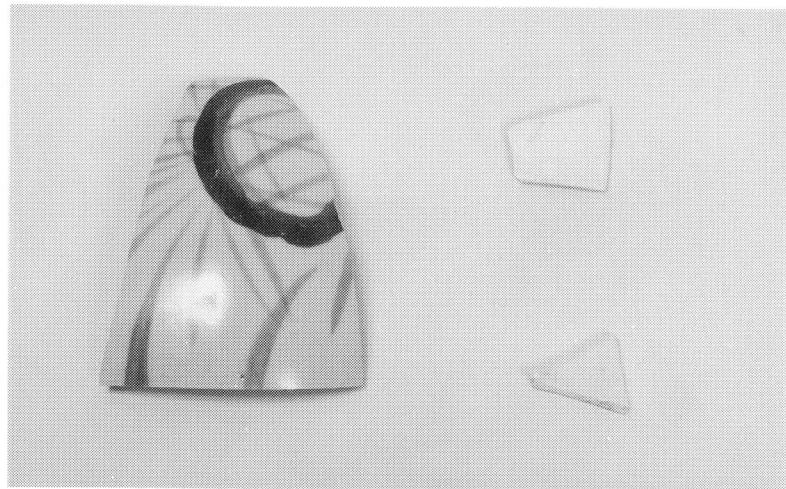
△ #4 K区



△ #5 K区



△ #6 M~R区



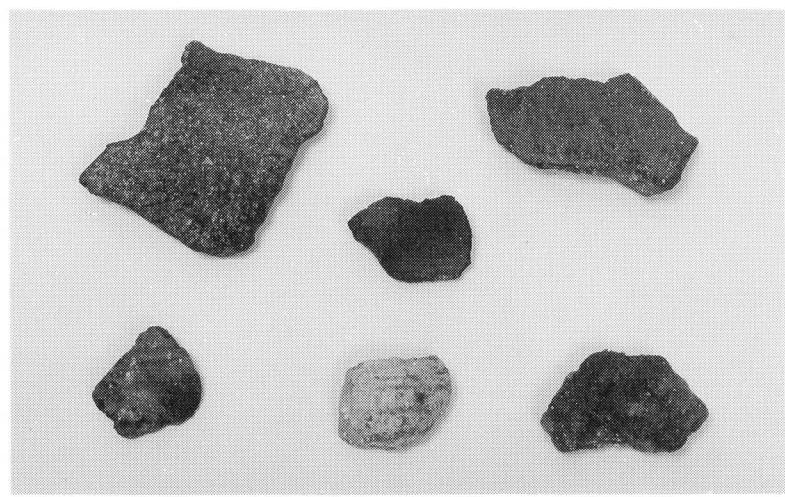
△ #7 M~R区



△ #8 M~R区



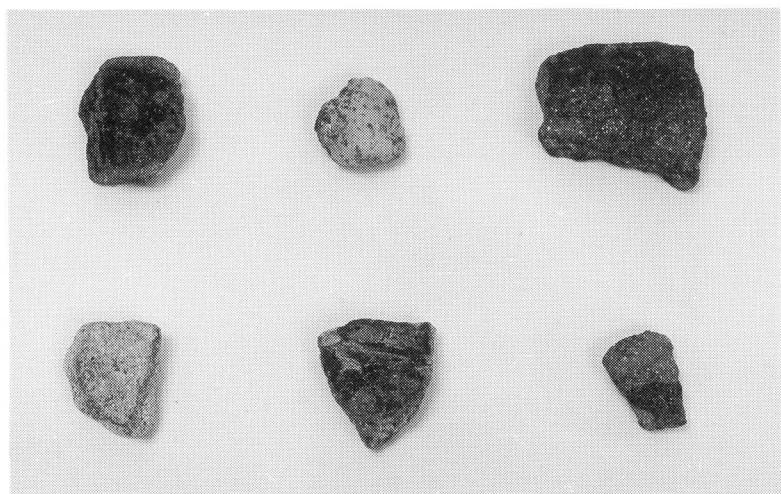
△ #9 M~R区



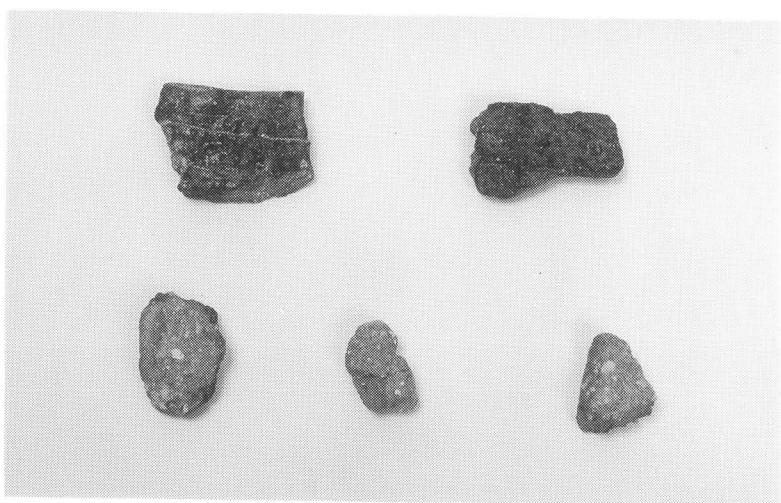
△ #10 M～R区



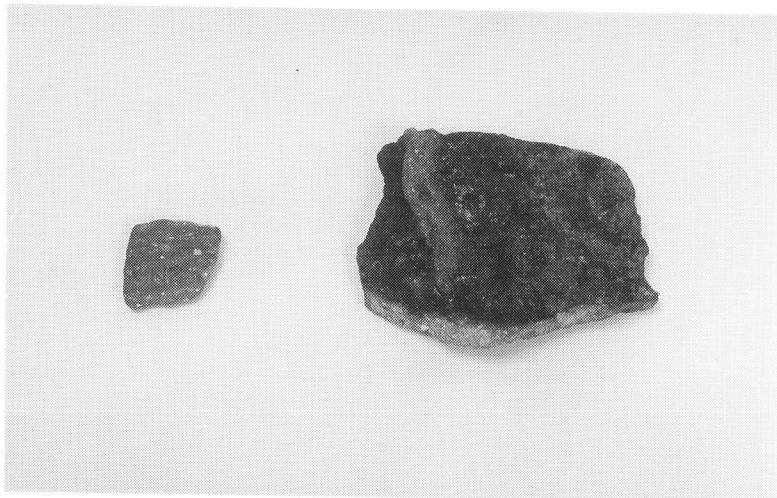
△ #11 M～R区



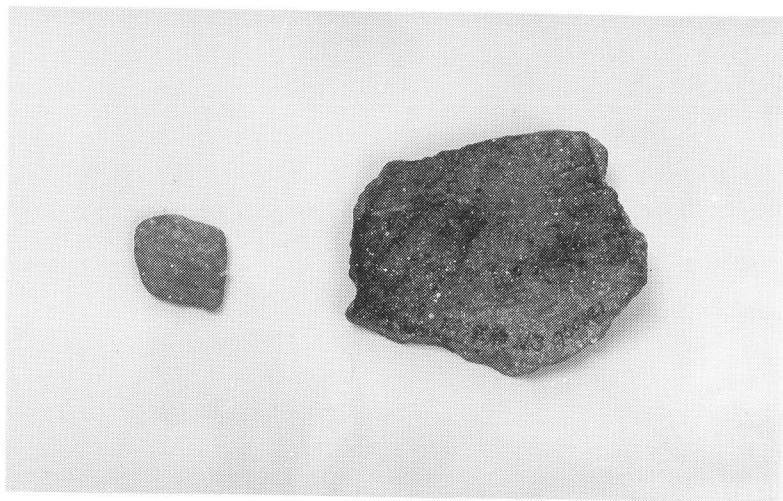
△ #12 M～R区



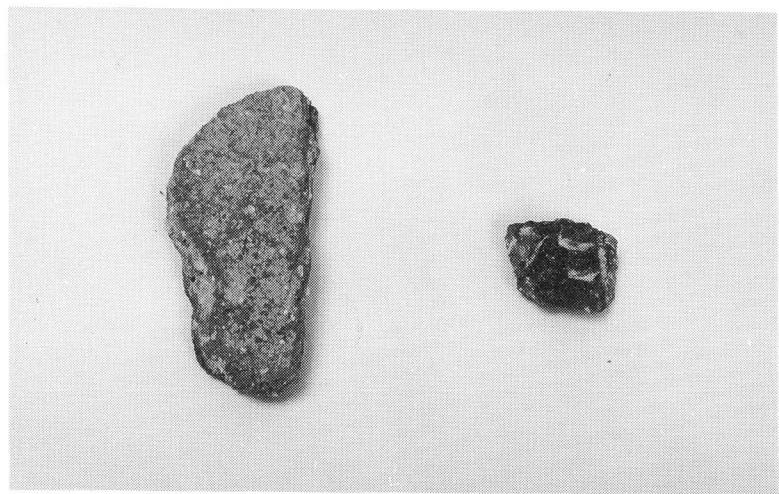
△ #13 M～R区



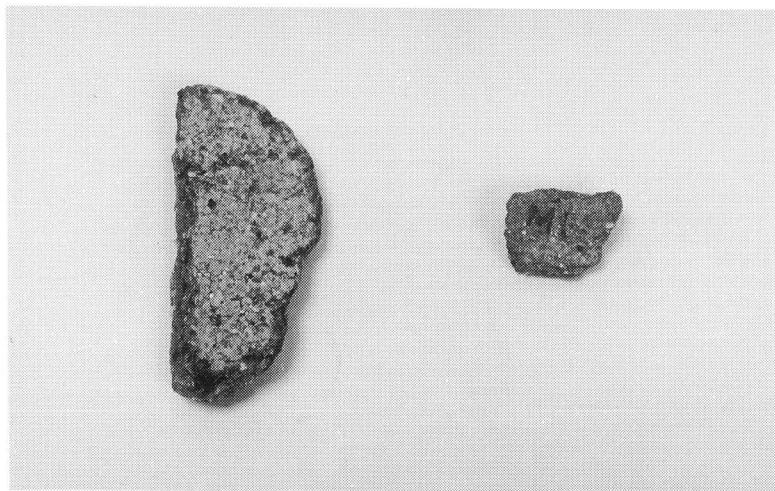
△ #14 M～R区



△ #15 M～R区



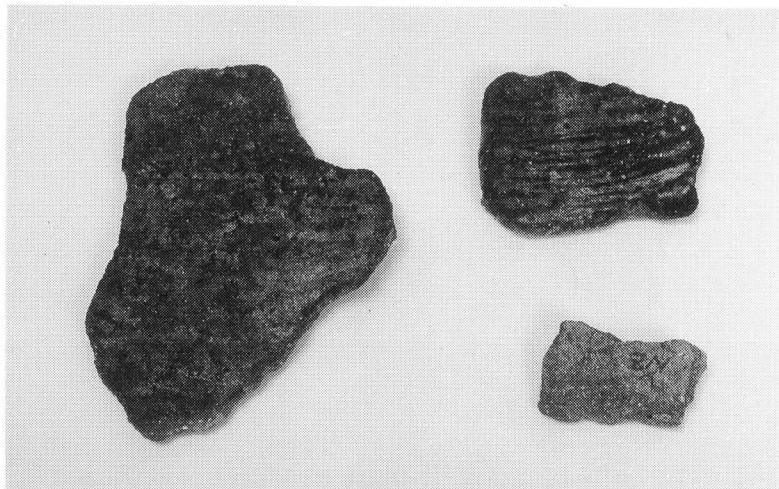
△ #16 M～R区



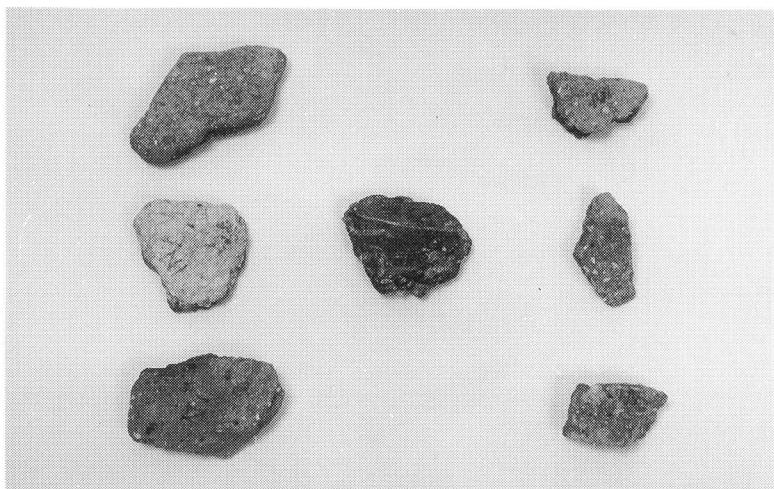
△ #17 #16の裏面



△ #18 M～R区



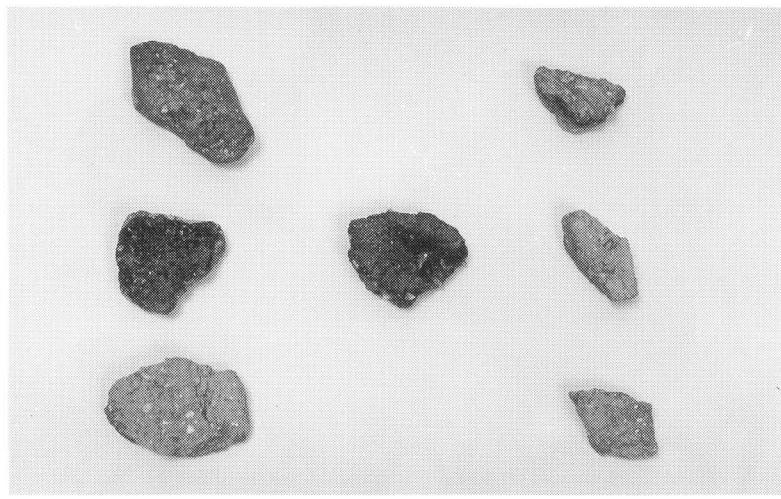
△ #19 #18の裏面



△ #20 M~R区



△ #21 #20の裏面



△ #22 M～R区



△ #23 S X 0 3 の出土



△ #24 S X 0 6 の出土

平成8年（1996）3月

島根県鹿足郡柿木村
向津原遺跡発掘調査報告書（第三次）
柿木村運動交流広場建設工事に伴う発
掘調査

編集発行 島根県柿木村教育委員会
印 刷 大井印刷有限会社